

夢洲の自然再興の可能性を知ってもらうために

文・写真 加賀まゆみ(夢洲生きもの調査グループ)

現在、「夢洲生きもの調査」は、ほぼ月一回、大阪港湾局・博覧会協会に付き添われ、野鳥の会大阪支部メンバーとともに、行っている。調査とは名ばかりで、工事未着手エリアしか見ることができないが、それでも夏にはセイタカシギの繁殖が確認でき、秋になると、いつものシギ・チドリが、数は少ないがやってきているのを見ることができた。しかし、この夏の暑さや秋の雨の少なさの中で、湿地はほぼ干上がり、今後鳥が増える可能性は低い。

また、大阪港湾局や博覧会協会と、環境5団体(日本自然保護協会・WWFジャパン・日本野鳥の会・野鳥の会大阪支部と保全協会)との面談(工事説明会を含む)も、ほぼ2か月に一度程度続いている。が、当方の主張の根拠である「市長意見で確認されたように自然環境を戻す」というものが、具体的にどのような環境なのか、話はあまり進んでいない。こちらの希望を絵にかいて出すように要請されたが、5団体間の温度差もあり、当協会内でもイメージのすり合わせが難しく、なかなか理想復元図を描くに至っていない。

9月には、きしわだ自然資料館のホールで、資料館共催の写真展「夢洲の生きものたちの記録」を開催させていただいた。公共の施設

が万博予定地の問題を扱うことに、どのような市民の反応があるか不安を持っていたそうだが、「こんなに自然が豊かなら、つぶさんと世界の野鳥好きの人にきてもらったらいいのに」という声が多かった、とのことである。観覧者に自然好きが多いとはいえ、だんじりで訪れた一般の人たちからもそのような声がたくさん聴かれた、と担当者は語る。そして岸和田だけの写真展にしたらもったいない、と、関係者に声をかけていただき、来年早々和歌山方面へ巡回することが決まりつつある。

また、11月から12月5日まで(この冊子が発行される頃には終わってしまうので残念だが)、千里の万博記念公園の自然学習館実習室で、今回と同じ写真展を巡回展示することが決まった。12月から1月の冬休み期間には阿倍野図書館でのミニ写真展も予定している。たくさんの方に、かつての夢洲がこのような生物多様性豊かな環境となっていたことを写真を見て実感していただき、ぜひ大阪湾奥のこの広大な埋め立て地の「自然の豊かさ」の可能性を確信していただけたら、と思う。そして、この夢洲を日本のネイチャーポイントの象徴として自然再興していきたい。



写真-1 きしわだ自然資料館写真展風景(2023.9.9)



写真-2 夢洲2区塩性湿地の野鳥を調査(2023.10.26)